

毎日新聞 2012年3月11日

## 大震災1年:被災地で心の支えに、大学休学しボランティア 岩手・野田村を支援、阪大・塩田さん /兵庫

岩手県野田村を支援している西宮市のNPO法人「日本災害救援ボランティアネットワーク」などが現地に設置した事務所のスタッフとして、大阪大学人間科学部3年、塩田朋陽(ともや)さん(21)が赴任することになった。塩田さんは大学を1年休学することにしており、「50年後にでも、あの時、ボランティアが来てくれてよかったと言ってもらえるような、心の支えになりたい」と話す。東日本大震災から1年となる11日、現地の追悼式に出席し、手を合わせる。

塩田さんは昨年5月、野田村へ初めてボランティアに行き、泥かきやがれきの撤去作業を手伝った。以降、毎月1～2回、野田村へ通い続けている。

「大阪大学災害ボランティアサークルすずらん」のメンバーでもあり、これまで、炊き出しや仮設住宅への引越、夏祭りの手伝いなど、様々な活動に参加。最近では仮設住宅で防寒具などの物資を配布したり、見守り活動をしている。年末年始も、野田村で過ごした。雑煮の炊き出しをした際、すりつぶしたクルミに餅をつけて食べる、地元の雑煮を逆に振る舞ってもらった。

自分の無力さを痛感することも多い。足湯の活動中、ポツリポツリと被災体験を話す住民たち。「一緒に逃げていた人が流された」「逃げ遅れて水を飲み、何とか毛布にくるまって助かった」。どうしたら苦しみを和らげられるのか分からず、落ち込んだこともあった。それでも、「自分の息子みたいや」と言ってくれる男性や、仮設を訪問したら「あがってき」と言って、ごちそうしてくれる女性たちと出会った。「支援しに行ったのに、自分は野田村の人に支えてもらっている」。人々の温かさに報いたいという思いが生まれた。

友人が就職活動を始めても、塩田さんは身が入らず、野田村の事が気になっていた。仮設住宅の期限は2年間。被災者が仮設を出るころ、塩田さんは卒業の時期を迎える。「被災者が一番支援を必要とする時期に、中途半端な事しかできないのは嫌だ」と、1年間休学して野田村に行くことを決めた。

同ボランティアネットワークは、現地で出会った弘前大学などのメンバーと「チーム北リアス」を結成。昨年8月には、住民から無償で提供してもらった土地にプレハブ小屋を建て、「チーム北リアス」現地事務所を設けた。

塩田さんは今後、会計などの事務のほか、野田村の人と連携して、現地のニーズに合った新たな企画を考えていきたいという。仕事は完全なボランティアで、生活費はアルバイトで蓄えた貯金を取り崩すほか、助成金の申請を考えている。「被災地は、まだ課題だらけ。明日の生活で手いっぱい、先が見えない。でも、そんな時だからこそ、野田村を好きでいつづける誰かが必要」と語る。

塩田さんは31日から、現地で働き始める。

【大沢瑞季】